

# 韓国における日本産養殖マダイの価値

## —輸入動向と食文化を中心に—

韓国農林水産食品部 柳 珉 錫  
広島大学大学院 山 尾 政 博

### 1. 序論

#### 1) 研究の背景

近年, 韓国の対日水産物輸出は減少傾向をみせている。すなわち, 1988年に15億ドルだった韓国の対日水産物輸出額が2000年に入ってから11億ドルに減り, 2009年にはさらに7億ドルにまで減った。韓日間の貿易動向をみると, ほとんどの分野で, 韓国側が貿易赤字を記録しているなかで例外的に水産分野では, この間, 黒字を記録してきた<sup>1)</sup>。しかし, 2000年以降, 韓国側の水産分野の貿易黒字が毎年大幅に減少しており, 水産業従事者だけでなく, 韓国民の大きな関心事になっている。韓国の対日水産物輸出額の減少は, 韓国国内の水産物の消費量増加と輸出対象国の多角化などが主な要因である。

日本からの水産物輸入動向をみると, 1988年に2,000万ドルに過ぎなかった輸入額が2009年にはその10倍である2億ドルまで増加した。輸入量の増加を主導してきた品目は, スケトウダラ, タチウオ, マダイなどである。2009年の場合をみると, 日本から輸入された水産物は81品種であったが, これら三つの魚種が輸入額の約半分を占めている<sup>2)</sup>。スケトウダラとタチウオの輸入量が急増した原因は, 1999年に発効した新韓日漁業協定のためであった<sup>3)</sup>。それでは, 活マダイの輸入量が大幅に増加した原因は何なのだろうか。本論文の目的は, 韓日の養殖マダイの生産と貿易構造を明らかにすることである。また, マダイ貿易の背景と展望を考察するため, 韓国のマダイ食文化, 輸入商材としての活マダイの価値などを検討する。

#### 2) 問題の所在と課題

1990年代後半から本格化した韓国の養殖マダイ生産量が持続的に増加しているなか, 日本などからの養殖活マダイの輸入量も増加している。このように, 国内の養殖生産量が増加していくなか, 活マダイの輸入量も増加する理由が何かを明らかにするため, 韓国における日本産養殖マダイの価値を考察してみたい。次の三つの課題を中心に検討する。まず第1に, 最近の養殖活マダイの輸入量が急増する理由が何かを検討する。それによって, 輸入量の増加は一時的な現象なのか, または今後も続くのかを明らかにする。第2に, 韓国の養殖活魚の輸入と流通の特徴を検討し, 日本産の養殖活マダイ輸入量の変動を規定する要因を明らかにする。その際, これらの特徴がマダイの「食文化や食材に対する顧客の

価値」とはどのような関係があるかを検討する。第3に、養殖活マダいの競争力（貿易量の決定要因）の具体的要因を分析し、今後の動向を予測する。そのため、韓国における養殖マダいの供給と消費動向などを考察する。すなわち、韓国における日本産養殖マダいの輸入量増加の原因を明らかにするため、マダイ養殖と貿易及び消費をめぐる経済的な側面はもちろん、顧客の価値などの非経済的側面まで分析・考察する必要がある。

### 3) 調査および分析方法

#### (1) 調査方法

養殖技術・統計などに関しては関連文献や統計資料、先行研究、インターネットなどを利用して調査を行った。生産現場および経営状況に関しては、韓国および日本の双方で実態調査を行った。韓国の場合はマダイ養殖の発祥地であり、生産量が最も多いトンヨン为主要調査対象にし、データの正確さを高めるためにコチェ・ヨス地域でも調査を行った。日本では、マダいの最大産地であり、輸出量の大部分を占めている愛媛県宇和島市を主要な調査対象地域に選定した。貿易に関しては、韓国では日本産マダイ最大の入港地であるトンヨン地域を調査対象にし、日本の場合には宇和島で実態調査を行った。また、流通および消費実態に関してはプサンとソウルの卸売市場などで調査を行った。

#### (2) 分析方法

日本と韓国の養殖マダいの競争力と貿易量の変動要因、また韓国人の顧客価値などを分析することとした。両国間の、マダいの国際競争力評価において、生産・消費構造などを評価する競争力源泉評価（直接評価方式）<sup>4)</sup>と、貿易実績と市場占有率などを評価する競争力成果評価（間接評価方式）を並行して今後の展望を予測する<sup>5)</sup>。

## 2. 韓国の活マダいの供給（生産と輸入）

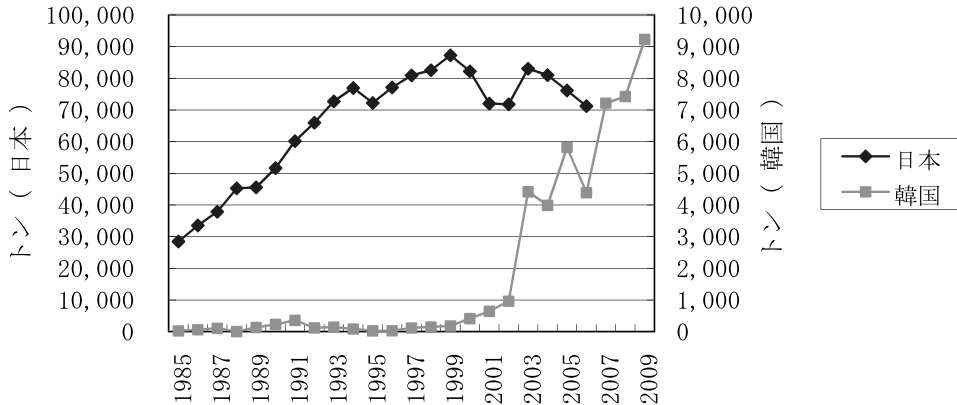
### 1) 生産

#### (1) 生産量変化の推移

韓国のマダイ養殖は1984年に始まったが<sup>6)</sup>、生産が軌道に乗ったのは2000年以後である。2000年までは年間数十トンから数百トン程度の生産量だったが、2002年に約1千トンを突破し、2009年には約9千トンの生産量を記録した。マダイ養殖生産量が急速に増加した要因は、それまで主要な養殖魚種であったヒラメとクロソイ<sup>7)</sup>の採算性が悪化したことから、養殖業者が養殖対象魚種の転換を図ったことによる。マダイ養殖の特徴は、養殖漁家がマダイだけを専門的に養殖するのではなく、クロソイ・スズキ・クロダイなどの複数の魚種と組み合わせて養殖していることである<sup>8)</sup>。

ただ、マダイ養殖が本格的に始まって10年しか経過していないために、現在はマダイ養殖技術の確立途上である。具体的には、沿岸水温条件が必ずしもマダイ養殖に適していな

韓国における日本産養殖マダイの価値



出所)

図1 韓国と日本のマダイ生産量

1.韓国

- 1) FAO, “Yearbook of statistics”, (1989以前, 各年版)
  - 2) 韓国農林水産食品部, 「漁業生産統計」, (1990年以降, 各年版)
- 2.日本: 農林水産省経済局統計情報部, 「漁業・養殖業生産統計年報」, (平成20年, 平成15年, 平成7年, 昭和60年)

いことから、稚魚放養後、出荷用の成魚を収穫するまでの期間の斃死率が30～60%と非常に高い<sup>9)</sup>。斃死率の高さが生産費用を増大させる要因<sup>10)</sup>であり、マダイ養殖業の発展にとって最大の阻害要因になっている。その上、主要マダイ養殖地域であるトンヨン、コヂェ、ヨスなどの一部海域では台風および赤潮被害が頻繁に発生して、養殖業の競争力を低下させている<sup>11)</sup>。

## (2) 生産費用

韓国と日本の間で、養殖マダイの生産費用を比較するために、それぞれで聞き取り調査を実施した。韓国側はトンヨンのD地域で、日本側は宇和島のY地域で調査を行った。調査結果によると、韓国はマダイ1kg当りの平均生産費が929円であるが、日本は534円で韓国より43%ほど少ないことがわかった。韓国の生産費が日本より高い最も大きな理由は、養殖期間中の斃死率の高さだった。韓国の調査対象養殖場のマダイの斃死率は40%前後だった。また、韓国では日本より人件費の割合が高かった。一方、日本の場合には種苗費・飼料費などの割合が韓国より高かった。

## (3) 養殖環境

海産魚類養殖の環境要因の中で一般的に成長と最も関係が深いのは、漁場の水温である<sup>12)</sup>。漁場の水温は養殖経営の損益に大きく影響を及ぼしている。各地域別水温の一日観測値を分析した結果、日本の宇和島地域がマダイ養殖に最も適した地域であった。マダイは通常は水温が13～14℃以下になったり、29℃以上になったりすると摂餌量が著しく落ち

表 1 マダいの地域別生産費 (30 か月基準)

調査地域		宇和島市 (Y 地域)	トンヨン市 (D 地域)
調査対象マダイ生簀容積 (m <sup>3</sup> )		5,798	16,128
出荷重量 (kg)		64,672	126,225
生産費 (千円)		34,515	117,241
生産費中の割合 (%)	種苗費	15	8
	飼料費	65	54
	外部人件費	3	22
	その他	18	16
kg 当り生産費 (円)		534	929

出所) 柳珉錫・山尾政博 2007, 「韓・日間の養殖魚類の貿易動向と産業競争力」, 『地域漁業研究』 47 巻 1 号, 87 ページ

て、成長速度が急激に落ちたりほとんど止まるようになる<sup>13) 14)</sup>。

したがって、年間を通して、水温が14～28℃を維持する日数が多い地域ほどマダイ養殖に有利だといえる。特に、マダイは20～28℃の水温で摂餌活動および成長が最も旺盛なために同水温の維持期間はマダイ養殖の競争力に直結している。井上ら(2002)による、水温別マダイの成長状態の考察結果を見れば、平均水温25.6℃では日間増肉率が0.39～0.62%だった。しかし、平均水温15.0℃では日間増肉率が0.10～0.21%で約1/3に過ぎなかった<sup>15)</sup>。すなわち、年中成長適水温期間が短いほど養殖期間が長くなり、人件費・減価償却費などの諸費用が増加する。各地域別、年中20～28℃の水温維持期間を見れば、宇和島が171日、香川が138日、ヨスが136日、トンヨンが133日だった。また、年中14～28℃の水温の維持日数を見れば、宇和島が348日、香川が222日であり、韓国の場合にはトンヨンが237日、ヨス地域は219日だった。つまり、マダイ養殖において成長速度および斃死率などを左右する自然環境的な側面で、愛媛地域が他の地域より有利な地域といえる。昔から愛媛近隣など瀬戸内海地域が天然マダイの主産地<sup>16)</sup>だった理由は、このようなマダイの棲息に最も適した水温のためであると考えられる。

水温以外の天然の養殖環境である海水の流動性、災害被害の恐れおよび水質などは同じ海域でも養殖場の位置によって違う場合が多い。しかし、水温の場合には、同一海域内では大部分は同様な条件を維持しているために漁業者が選択できる幅は狭いといえる。水温以外の養殖環境に関して比較対象地域の特定地点で聞き取り調査を実施した結果を見れば、現在マダイ養殖をしている地域は大体の養殖環境が良好だった。ただし、トンヨンS地域の場合は赤潮などの自然災害による被害を受ける恐れが多少高かった。それに反して、日本の宇和島Y地域の場合には最近赤潮の被害がなかったし、今後も被害の恐れがほとんどないという点が特徴だった。

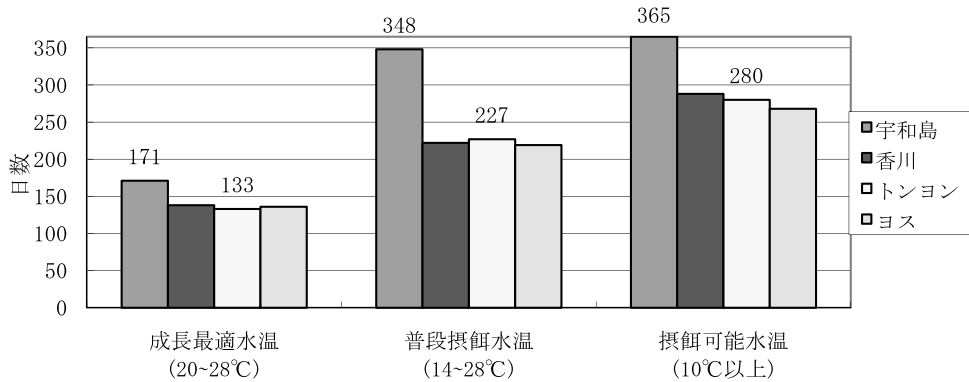


図2 各地域別水温維持日数

出所) 柳珉錫・山尾政博2007, 「韓・日間の養殖魚類の貿易動向と産業競争力」, 『地域漁業研究』47巻1号, 84ページ

一方、韓国のマダイ養殖過程で高い斃死率の第1の原因は、冬季の低い水温であった。マダイは通常、水温が6°C以下になれば斃死が進行することが知られている<sup>17)</sup>。しかし、問題は、水温が6°Cより高くても14°C以下では正常な摂餌活動ができないために、14~28°Cの範囲外の水温期間が長いほど、魚類の活力が弱くなるという点である。活力が弱くなった魚類は病気に感染しやすく、また長期間摂餌ができないと斃死が進む場合がある。そのうえに飼育管理技術<sup>18)</sup>が不十分な場合は斃死率がより一層高まり、養殖業の経営悪化を招くことになる。第2に、養殖漁業者が高い斃死率を予想して稚魚を過剰放養することで、ストレスや外傷などのために魚の斃死率が高まることである。実際にマダイ生簀1㎡当たり稚魚の放養尾数をみると、日本は7.7~10.0尾、韓国は11.6~15.5尾だった<sup>19)</sup>。第3に、正常な摂餌・成長期間中にも寄生虫性・細菌性・ウイルス性疾病による斃死が起きている。もちろん、このような斃死は他の養殖魚種や日本など他の国でも発生している共通した現象だが、これも疾病管理をさらに徹底することである程度減らすことはできる<sup>20)</sup>。

## 2) 輸入

### (1) 輸入量と輸入国

韓国の活マダイ輸入量は過去10年間、年平均25%の高い増加率を見せている。輸入量を見ると1999年には約1,700トン水準であったが、2009年には約5,100トンになっている。日本のマダイ養殖場からトンヨン港までの運送は主に活魚運搬船を利用している。2010年10月現在日本産マダイの運搬船は16隻で、うち5隻は韓国船籍であり、11隻は日本船籍である。1航海当たり、日本船舶の場合には活魚20~30トン程度を輸送する一方で、韓国船舶は10トン前後を輸送している<sup>21)</sup>。

しかし運搬船1隻当りの年間運搬量は韓国船舶と日本船舶がほぼ同じである<sup>22)</sup>。韓国船

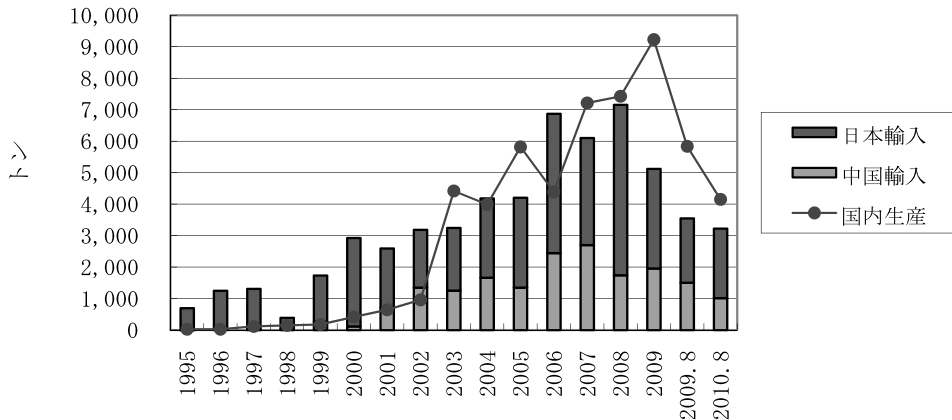


図3 韓国の活魚輸入量

出所：韓国関税庁、「輸出入統計」, (<http://www.customs.go.kr>)

船は韓国と日本など国家間の活魚運搬を専門としているが、日本の船舶は国内での地域間活魚運搬の役割もしている。また、一部は活魚運搬船でなく福岡港とプサン港の間に就航している定期旅客船を利用している<sup>23)</sup>。この場合、マダイを乗せた活魚運搬車をそのまま旅客船に積み込み、韓国に到着後は、その活魚運搬車が韓国内保税装置場<sup>24)</sup>まで運送している。その活魚運搬車が日本へ戻る際には、日本に輸出する活ヒラメを運搬する機会が多いが、定期旅客船による運送は費用を節約できるという利点がある。

## (2) 輸入活マダイの入港地

日本からの輸入マダイ運搬船の入港地は90%以上が慶尚南道トンヨン付近である<sup>25)</sup>。2010年11月現在、日本から活マダイを輸入している会社は22社あり、そのうちトンヨンに事務所を構える会社が16社ある。輸入活マダイの大部分がなぜトンヨン港を中心に輸入されるかを明らかにするため、トンヨンの地域的な特性の考察が必要であろう。活マダイ輸入地としてトンヨンの特徴は大きく3つある。

第1に、トンヨン地域は韓国マダイ養殖の発祥地であり、今も主産地である。2009年現在、国内マダイ生産量の94%がトンヨン付近で生産されている。すなわち、トンヨンは国内養殖マダイの流通・供給ネットワークを最大限利用することができる地域である。第2に、トンヨン地域は多種類の魚種を養殖する国内最大の産地である。2009年で見ると、トンヨン付近の養殖魚類生産量は全国の37%を占めている。活魚流通業者にとっては、ひと所で諸種類の養殖魚種を集荷できて流通費用を節減できるという利点がある。第3に、トンヨンは韓国最大の水産物供給基地の役割を果たし、同時に巨大な消費市場であるプサン<sup>26)</sup>に近いという地理的利点がある。トンヨンはプサン地域に活魚を供給すると共に、活

韓国における日本産養殖マダイの価値

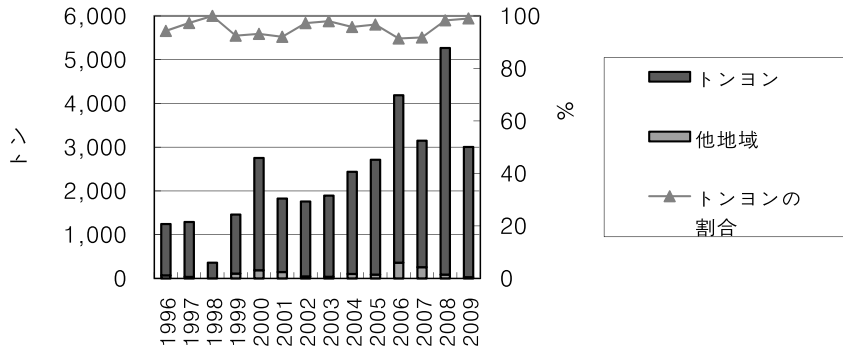


図4 輸入活マダイの港別入港量

出所：韓国国立水産物品質検査院, 「輸入水産物検査実績」, (各年版)

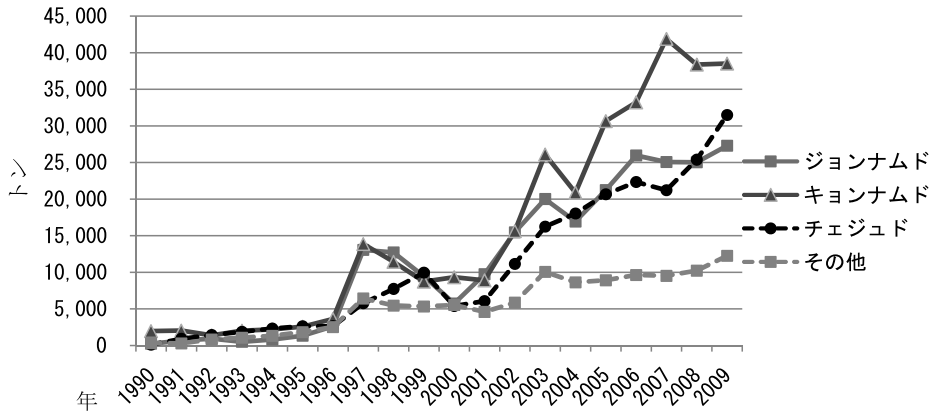


図5 韓国地域別養殖魚類の生産量

出所：韓国農林水産食品部, 「漁業生産統計」, (各年版)

魚はトンヨン, その他の水産物はプサンというように供給分担を通して全国水産物供給基地の役割を担っている。以上のような地域的な有利性を発揮しながら, トンヨンは養殖活魚の最大分散地として機能している<sup>27)</sup>。

(3) 日本養殖マダイの輸出地域

韓国に輸出する日本マダイの養殖地のなかでは, 愛媛県の宇和島市が最も多い。日本からの輸入量が多い輸入会社, 3社からの聞き取り調査結果によると, 宇和島産が60%で最も多く, ついで五島産が25%, 大分産が10%, 対馬産が5%の順であった。日本のマダイ輸出会社に対する聞き取り調査結果でも輸出量が愛媛・長崎・大分県の順で多いことが確認できた。

(4) 貿易および流通費用

日本の宇和島産マダイが韓国のトンヨン港に到着して、卸売業者に引き渡される過程までの価格変化の流れを、聞き取り調査をもとに図7に示しておいた。すなわち、養殖場出荷された活マダイは韓国の卸売業者<sup>28)</sup>に引き渡される時まで出荷価格に87～102%の関税・運送費・商業利潤などの流通費用が必要であった。

流通費用の中で最も大きな割合を占めるのが関税で、全体の約53～62%に達する。ただ、最初に調査をした2006年のマダイの輸入関税は45%または1kg当り3,292ウォンであったが、2010年現在は31%または2,272ウォン<sup>29)</sup>、輸入関税による流通費用は大幅に減り続けている。

前出表1では、マダイの日本国内での流通費用を調べるために、宇和島産マダイを基準として養殖場出荷価格と消費地卸売市場での価格差を比較した。その結果、養殖場出荷したマダイが卸売市場で競売されるまでには、出荷価格に28～35%の流通費用が必要であった。宇和島産マダイが韓国の消費地卸売業者に至るまでの流通費用は、関税以外のものは28～49%である<sup>30)</sup>。したがって、輸入関税を除くと、韓国輸出と日本国内流通費の差はそれほど大きくはない。

参考までに、2010年11月現在、日本産と中国産マダイの輸入業者の引き取り価格と、韓国での1次卸売業者の売値価格は表2のとおりである。

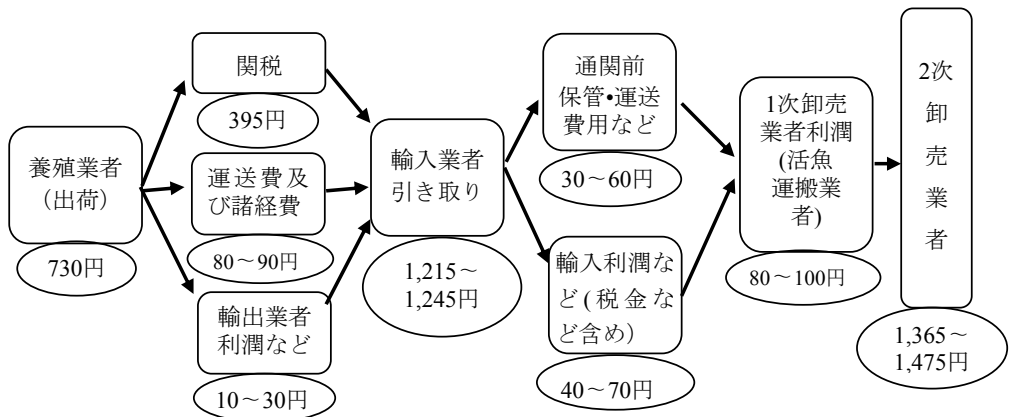


図6 養殖場出荷以後の価格変化事例 (1kg当り, 宇和島→トンヨン)

注) 1 調査基準：大きさは1尾当り1.1kg

2 為替：833ウォン/100円基準

出所) 柳珉錫・山尾政博 2007, 「韓・日間の養殖魚類の貿易動向と産業競争力」, 『地域漁業研究』47巻1号, 83ページ (2006年6月基準)



表 2 活マダイの輸入業者の引き取り価格と1次卸売業者の売値価格

	輸入業者の引き取り価格	1次卸売業者の売値価格
日 本	1,053 円 /kg	1,162 ~ 1,452 円 /kg
中 国	848 円 /kg	1,017 ~ 1,089 円 /kg

出所) 聞き取り調査(トンヨン WJ 社, BK 社)により作成(2010年6月)

**(5) 韓国の日本産マダイの輸入量に関する主要外部要因**

韓国の日本産マダイ輸入量を変化させる主な外部要因は以下の四つである。第1に、韓国内のマダイ消費量の変化である。韓国人は昔からタイを好んで食べ、これを高級魚種として珍重してきた。特にマダイの場合には、古書でも多くの料理方法が紹介されているなど、最高級魚類として認識されてきた<sup>31)</sup>。韓国人が好んで食べたマダイは、以前には、韓国国内でも相当量漁獲されたが、水産資源の減少などに伴い漁獲量が減っている。一方、需要量が増加しているため輸入量は継続的に増加している。特に、日本から輸入される刺身用活マダイは、品質が良い高級魚種として消費者の間では広く認識されている。

第2に、日本円と韓国ウォンの為替レートの変化である。貿易相手国の間の為替レートの変化は、レートの変化幅に応じて貿易条件を直接的に変化させる<sup>32)</sup>。したがって、2009年以降韓国ウォン切下げは日本からのマダイ輸入量を減少させる要因として作用している。韓国ウォンの為替変化の推移を見ると、2004年の平均為替レート<sup>33)</sup>が100円当り1,058ウォンだったが、2005年には930ウォン、2007年には790ウォンまで円の為替レートが下落したが、その後上昇し2008年には1,080ウォン、2009年には1,363ウォンになった。円の為替レートが下落する場合、韓国から日本に輸出する活ヒラメの輸出量は減る反面、日本からの活マダイの輸入量は大幅に増加する。したがって、円の為替レートが上昇する場合はその反対の状況になる。もちろん、マダイ輸入量の変動のすべてが為替レート変動による結果と見なすことはできないが<sup>34)</sup>、輸入量変化に大きく影響をおよぼしたことは間違いのない事実であろう。

第3に、輸入関税率の動きなど、貿易環境の変化である。WTOまたはFTA協定が締結される場合には、輸入関税率の引き下げなど、貿易障壁が除去されると予想されるので、マダイをはじめ、養殖活魚の貿易量を大きく変化させられると思われる。

最後に韓国内、他の養殖魚種の生産動向である。養殖魚類の消費は、魚種間に代替的性質<sup>35)</sup>があるので、ある意味では韓国の活魚市場で日本産マダイと韓国産マダイの間の競争だけではなく、韓国産ヒラメと日本産マダイも競争関係にあると言える。したがって韓国国内における、他の養殖魚種の生産量及び生産単価の変動は、今後日本産マダイの輸入量に影響を及ぼすことになる。

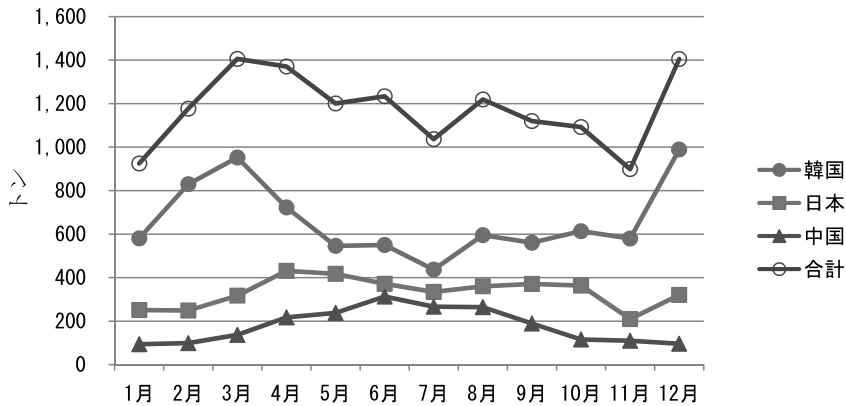


図7 過去3年（2007～2009）韓国の月別マダイ供給量

出所) 1. 韓国農林水産食品部, 「漁業生産統計」, (各年版)  
 2. 韓国関税庁, 「輸出入統計」, (<http://www.customs.go.kr>)

### 3) 韓国市場への活マダイの月別供給

2007年から2009年まで過去3年間, 韓国のマダイ消費動向をみると, 毎月1千トン前後の消費量を記録しているが, 月別にみると相当な変動がある。すなわち, 水温が急激に下降する直前の時期である12月と, 水温が上昇し始める時期である3月頃に出荷量が多くなる。これは, 12月以後の低水温期と, 3月以後の水温上昇期には, 斃死率が高いため, 成魚の出荷量を増やしているためである。韓国の沿岸は, 日本の愛媛地域に比べ水温が低くて, 養殖マダイの主成育期間が5月から10月頃までの6ヶ月に過ぎないため, その時期には, 成魚の出荷量を減らしている。日本産と中国産の養殖マダイの輸入量が増える時期は, このように, 韓国産マダイの出荷量が減少する時期とほぼ一致している。また, 日本産と中国産マダイの場合も, 輸入量変化が負の相関関係をみせている。すなわち, 日本産マダイの輸入量が減る時期である6～8月頃には, 中国産マダイの輸入量が大幅に増加する現象がみられる。

## 3. マダイの消費

### 1) 韓国の活魚流通と消費の特徴

輸入活魚を含め, 韓国の輸入水産物流通の最も大きな特徴は, 卸売市場を経て流通する数量が輸入量全体の10%以下であり<sup>36)</sup>, 大部分の輸入活魚も卸売市場を通らないで流通している。市場外流通が多い理由は, 第1に, 卸売市場の競り価格が不安定で, とすると競り価格が低い場合, 損害を被る恐れがあることである。第2に, 卸売市場を通して流通させると流通費用が多く発生<sup>37)</sup>するのはもちろんだが, 流通の途中で大量斃死が起こった場合の責任の所在が不明になりがちで, トラブルが発生しやすいためである<sup>38)</sup>。そのため,

輸入活魚の場合には、卸売業者があらかじめ得意先を確保して卸売市場を経由しないで大部分を流通させている。国内産や遠洋産魚類の卸売市場経由率は輸入水産物よりは高いが、韓国の水産物全体の卸売市場の経由率自体が日本より低い<sup>39)</sup>。

韓国の輸入活魚の大部分が刺身屋を中心に消費されている。アンケート調査結果によれば、韓国人は刺身を食べる場合、92%が刺身屋で食べている<sup>40)</sup>。この点は、卸売または小売り業者の主な取引先が寿司屋・量販店・割烹などである日本とは異なる。刺身屋に供給された活魚は消費者の目の前で処理されるため、店には活魚水槽が設置されている。この刺身屋を中心にした消費を維持するために、活魚を扱う卸売業者または小売り業者らは、少量ずつ頻繁に供給しなければならない。こうした刺身消費の仕方が流通費用を押し上げている。そのため韓国政府は、活魚の店頭処理・消費にともなう高い流通費用を低くして、養殖活魚の消費を増やすために「鮮魚刺身普及事業」を支援した事があった<sup>41)</sup>。これは、刺身屋で活魚を処理する方式にかえて、特定の場所で活魚を大規模に処理し、刺身屋や家庭に配達する方式であった<sup>42)</sup>。しかし、消費者らは活魚の即席処理による消費方式に慣れているために、その事業成果があまりあがらなかった。

## 2) 韓国国内の活マダイの価格

2010年ソウルのノリヤンジン卸売市場の年間平均価格を基準として韓国産と日本産マダイの価格を比較すると、日本産が韓国産より8%ほど高い価格で取り引きされている<sup>43)</sup>。

一方、韓国・日本の間で貿易が活発に行われている活マダイと活ヒラメの韓国・日本のそれぞれの消費地卸売市場での価格を比較してみた。その結果、日本では活ヒラメと活マダイの価格差が大きいですが、韓国ではそれほど価格差が大きくはなかった。また、2010年に日本産マダイが韓国と日本の卸売市場で各々取り引きされた価格を見ると、韓国の卸売市場での価格が日本の卸売市場での価格より35%高い価格で取り引きされている<sup>44)</sup>。

表3 卸売市場での活魚競売価格（平均価格）

(単位：円)

		2009. 6月	2010. 6月	平均
韓国 (ノリヤンジン)	マダイ (トンヨン産)	1,091	1,121	1,106
	ヒラメ (済州産)	844	955	900
日本 (大阪)	マダイ (愛媛産)	750	1,019	885
	ヒラメ (大分産)	1,161	1,560	1,361

出所) 1. 韓国：ノリヤンジン水産卸売市場, 「水産価格情報 (毎月中旬, 中サイズ基準)」  
2. 日本：大阪卸売市場, 「市況情報」 (<http://www.shijou.city.osaka.jp>)

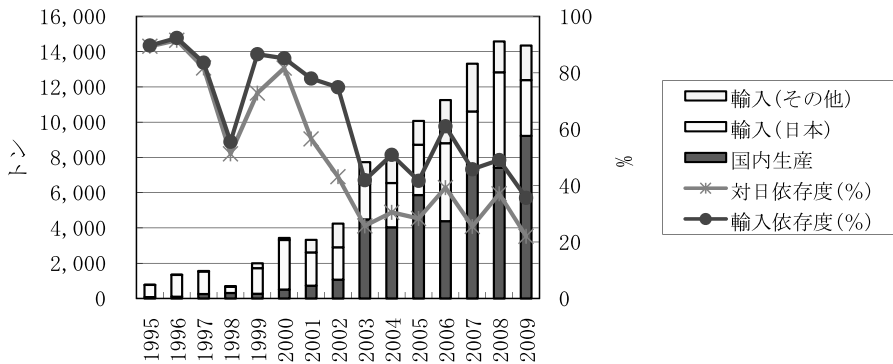


図8 韓国の活マダイ輸入動向と日本産マダイの韓国市場の占有率

出所) 1. 韓国海洋水産部, 「漁業生産統計」, (各年版)  
 2. 韓国関税庁, 「輸出入統計」, (各年版)

### 3) 近年の消費動向

韓国の活マダイの消費量は近年急激に増加しているが、その原因は大きく二つに分けられる。第1に、所得水準が向上するに伴って活魚需要が増加することで、国内マダイの生産量増加によって供給量が増加しているからである。第2に、同様な理由で輸入供給量が増えたことである。韓国のマダイ消費量のうち、日本産マダイの占有率を見ると、2000年までは80%以上だったが、その後中国産マダイの輸入増加および韓国の国内生産量増加によって、2009年には日本産の占有率が22%まで大きく下落した。これは、日本からの輸入量は増えているが、中国からの輸入量がさらに急増し、なおかつ国内生産量も消費の増加に刺激を受ける形で伸びてきたからである。

### 4) マダイの消費と国民所得

特定国家間、国民所得格差に変化が生じる場合<sup>45)</sup>、それら両国間の貿易において、貿易商品の種類や商品の品質などの変化が生じるのは当然の現象である。これは、特定国家の経済的能力の変化に伴い、消費者のニーズが変化するためである。言い換えれば、特定国家の国民所得水準と物価水準の変化は、他の近隣諸国の産業構造や業界の経営採算性に影響を与えるといえる。マダイのように魚類養殖の技術が普遍化されていく魚種の場合、商品の貿易量を決定する要因は、貿易相手国の生産条件（漁場環境など）だけでなく、国民の所得水準の変化も大きく影響している。ここでは、韓国の国民所得の変化が韓日間マダイ貿易と養殖マダイの生産構造にどの程度影響を及ぼしたのかを具体的に考察してみる。

韓国市場に日本産マダイの輸入量が急速に増加し始めたのが、1990年代後半である。この時期には、すでに韓国の魚類養殖の生産量が8万トンを超えた時期であった<sup>46)</sup>ので、養

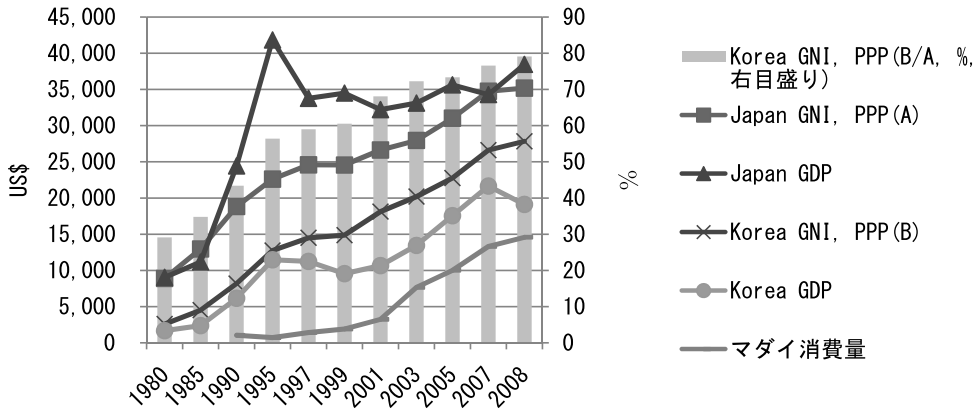


図9 韓国マダイ消費量と国民所得（一人当たり）

- 出所) 1. 韓国海洋水産部, 「漁業生産統計」, (各年版)  
 2. 韓国関税庁, 「輸出入統計」, (各年版)  
 3. 世界銀行, 「The World Bank World Development Indicators database」, (<http://www.worldbank.org>)

殖魚類の生産量が絶対不足している時期でもなかった。ただ、前述したとおりに、国民所得が増加することによって、食生活の多様化と高級化に関する消費者のニーズが、マダイの輸入量を増加させてきた。1999年の購買力平価ベースのGNI (GNI, PPP)<sup>47)</sup>をみると、日本は2万5千ドル、韓国は1万5千ドルであって、日本の60%水準になったのだ。このような所得水準の向上は、2000年以降、中間所得者層を中心に、日本産マダイの消費が急激に増加するきっかけになった。すなわち、国民所得水準の増加が活マダイ消費市場の拡大につながり、その市場を日本産が先占することになった。日本産養殖マダイによって形成された消費市場は、韓国のマダイ養殖を活性化させるきっかけにつながり、また中国産マダイの輸入量増加ももたらすことになった。

#### 4. マダイの顧客価値

##### 1) 食材としての活マダイ

日本から輸入されているマダイを含め、韓国で生産されている養殖マダイは、ほぼ全量が活魚の状態で流通されており、ほとんどが刺身の原料になっている。したがって、マダイの顧客の価値を考察するため、韓国人の活魚に関する認識を考察してみたい。韓国人の活魚に関する認識をみると、まず、活マダイなどの活魚は、健康に大変良い食品だし、味も良い食品として認識している。活魚刺身を食べる理由についてのアンケート調査結果によると、調査対象者の45%が「健康によい食品であるから食べている」と答えている。その次が「味がいい」の32%であり、その他が23%であった<sup>48)</sup>。第2に、活マダイを高級食

表 4 サシミに対する韓国消費者認識 (アンケート調査結果)

(単位: 人数, %)

	合計	性 別		年 齢				
		男	女	20代	30代	40代	50代	60代
事例数 (人数)	1000	493	507	197	234	229	156	184
サシミが牛肉より健康に良い	50.9	50.2	51.6	51.5	50.6	53.7	59.4	39.8
牛肉がサシミより健康に良い	16.1	18.1	14.2	14.8	16.2	13.9	16	20.5
分からない	33.0	31.8	34.2	33.7	33.2	32.4	24.7	39.7
サシミが豚肉より健康に良い	57.4	59.3	55.6	57.1	54.6	60.8	62.2	53.3
豚肉がサシミより健康に良い	16.5	17.4	15.6	15.1	18.7	16.9	18.4	13.1
分からない	26.1	23.3	28.8	27.9	26.7	22.3	19.4	33.6

出所) 韓国海洋水産物開発院 2008, 「養殖魚類の消費変化分析と対応案研究」, 62 ページ

品として認識している。またアンケート調査によると、韓国国民の嗜好度評価が高い活魚は、マダイ、クロソイ、ヒラメ、スズキ、ブリの順であった<sup>49)</sup>。第3に、活魚消費量の90%以上を外食の形で消費している<sup>50)</sup>。日本の場合には、量販店などが刺身を大量に販売しているが、韓国は販売量が少ないため、活魚を中食または内食の形で消費している割合が10%以下に過ぎない。第4に、活魚刺身の評価には、年齢による偏差(バリエーション)が少ない点である。すなわち、刺身は、20代から60代まで男女を問わず肉よりも好まれている。

## 2) マダイの食文化

韓国と日本は過去の歴史的関係と近隣諸国である理由から、文化的に多くの交流があっしてきた。そのため、部分的には文化的類似性または同質性をみせている。マダイの食文化の起源までを明らかにすることは出来ないが、基本的には韓国と日本は類似な食文化を持っている。韓国人にとってはマダイは幸運と長寿を象徴し、魚の王である<sup>51)</sup>。これは、日本人が、マダイを幸運とお祝いを象徴する魚として認識しているのと共通している。韓国でのマダイ料理は、先史時代以前<sup>52)</sup>から好んで食べられてきた。平安南道ヨンガンと釜山ドンサムドン貝塚からマダイの骨が出土されている点はその事実を裏付けている。多くの古書にマダイの調理方法が紹介<sup>53)</sup>されていることから、韓国人が、昔からマダイを好んで食べていたのが推測できる。"閩閩叢書<sup>54)</sup>"には、マダイに様々な薬味をのせて蒸した料理を「勝妓楽湯」と記録しているが、その意味は、マダイ蒸し料理が芸者と遊ぶ楽しさよりもましたという意味である<sup>55)</sup>。このように韓国人が古くから好んで食べてきたマダイは、過去には主に蒸して食べたが、現在では刺身として消費される割合が最も多い。そのほかにも鍋料理、メウンタン(辛口の鍋物)などの形で消費されている。一方、日本と

同様に、韓国でも若年層を中心に魚離れ現象が生じ、マダイの食文化が消えていく傾向をみせている。

## 5. 今後のマダイ貿易

### 1) マダイの貿易環境

韓日間の今後のマダイ貿易環境をみるため、韓国における活魚貝類の国別輸入動向と、韓国の対日水産物輸入の動向および、韓日間の水産物貿易動向を考察してみたい。マダイの韓日間貿易動向を予想する際、過去の貿易実態以外にその外部要因を考察しなければならない理由は、大きく三つに分けて説明できる。まず、韓日のマダイ貿易量の変化は、両国のマダイ生産動向以外にも様々な外部的な変数が作用するという点である。中国の活マダイ養殖動向、国際的な為替相場の動向、韓国の景気動向などが、その変数になるだろう。そのため、単純にマダイの生産と貿易動向を分析するより、もう少しマクロ的な視点から考察しなければならない。第2に、対日水産物の貿易動向とマダイの貿易動向は、これまで正の相関関係を示してきたという点である。したがって、日本からの水産物輸入を考察することによって、活マダイの貿易動向を長期的にみることができる。第3に、韓国の水産物輸入パターンがどのように変化してきたかを考察することで、マダイ貿易量の推移を予測することができる。韓国人の所得水準の向上による食生活の変化が活マダイなど水産物貿易にどのような影響を及ぼしたかを明らかにする。

#### (1) 韓国の活魚貝類の国別輸入動向

韓国における活魚貝類の輸入量は急激に増加する傾向をみせている。1999年に7万4千トンだった輸入量が2009年には37万9千トンに達し、10年間5倍以上の増加率を記録している。同期間中、水産物全体の輸入増加率は2.5倍であったので、活魚貝類の輸入増加率は全体水産物の輸入増加率の2倍以上であった。活魚貝類の輸入が急激に増加したのは日本、中国、ロシアなど周辺国からの輸入量が大幅に増加したためである。このような活魚貝類の輸入が増加した背景には、水産物消費の高級化を求める消費者の強い需要がある。したがって、今後も活魚貝類の輸入量の急増現象は続くと思われる。たとえば、従来は冷凍品または、生鮮冷蔵の状態で購入された水産物の一部が近年は「活魚貝類の輸入」に変わっていく現象が続くと予想される。所得水準の増加に伴い、消費者が冷凍水産品よりも味や品質の側面で優秀な活魚貝類を好むのは至極当然な現象であろう。

表 5 韓国の活魚貝類国別輸入実績

(単位：千 US\$)

	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
合計	74,430	124,575	162,269	238,035	269,295	315,497	299,890	378,407	420,306	424,048	379,364
中国	44,554	56,392	85,254	108,106	135,928	165,700	144,649	174,766	193,889	201,295	175,703
北朝鮮	8,091	13,073	16,426	20,143	25,022	27,216	37,260	43,755	51,560	55,987	69,090
日本	14,544	34,541	24,189	29,775	35,931	37,810	37,616	55,421	63,507	80,595	51,488
ロシア	61	471	4,625	35,949	41,983	51,538	56,129	79,406	86,315	60,154	62,332
その他	7,180	20,099	31,775	44,062	30,430	33,232	24,236	25,059	25,035	26,018	20,751

出所) 韓国国立水産物品質検査院, 「輸入水産物検査実績」, (各年版)

## (2) 韓国の対日水産物貿易の動向

韓国の対日水産物貿易の動向をみると、輸入量は増える一方、輸出量は減少する傾向をみせている。このような傾向が続けば、今後10年以内に韓国の日本からの輸入量が対日輸出量を超える可能性もあるという予測が出ている。韓日間の貿易全体では赤字になっているが、水産分野では例外的に貿易黒字を記録してきた。わずか10年前までは、韓国の日本からの水産物輸入量がこのように急増することを予測した人はほとんどいなかった。一方、2007年度の場合は数量的には韓国の輸入量が輸出量をすでに超えている。

韓国の対日水産物輸入の内容をさらに詳しく考察してみると、冷凍品の割合が減少する一方で、生鮮冷蔵水産物と活魚貝類の輸入量・額とも割合が増加している。2000年の対日

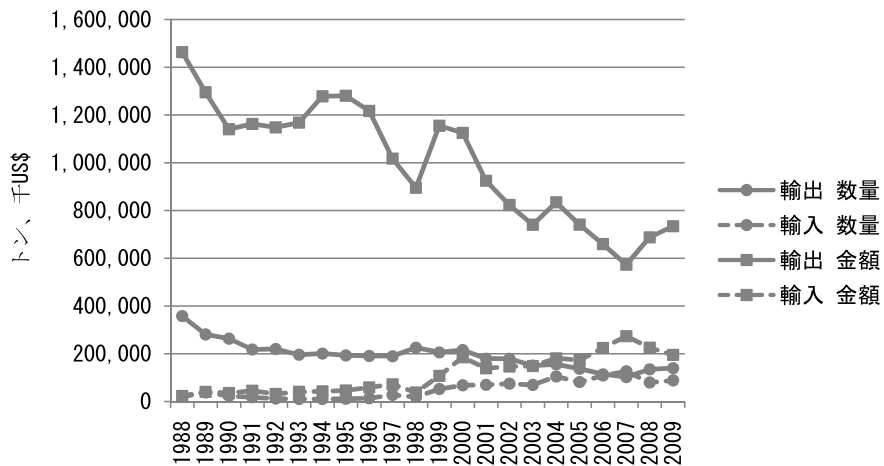


図10 韓国の対日本水産物輸出入動向

出所) 韓国国立水産物品質検査院, 「輸入水産物検査実績」, (各年版)



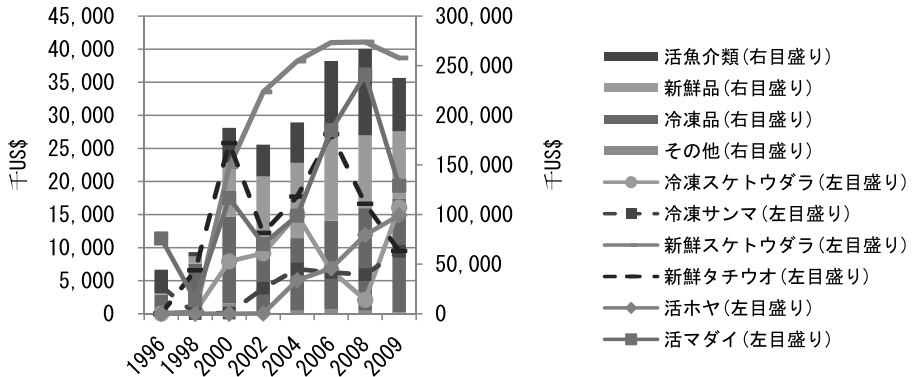


図11 対日本水産物品目別・品種別年度別輸入動向

出所) 韓国国立水産物品質検査院, 「輸入水産物検査実績」, (各年版)

水産物全体輸入額のうち「生鮮冷蔵と活魚貝類輸入額」の割合は35%だったが、2009年には63%まで上昇している。特に、生鮮冷蔵スケトウダラ、活ホヤなどの輸入量が持続的に増加している。ただ、2009年には活マダイと生鮮冷蔵タチウオが韓国の不況と日本の漁況不振でやや減少した。これからも新鮮冷凍水産物や活魚貝類の輸入量は持続的な増加が予想される。

### (3) 活マダイの輸入展望

韓国の日本産マダイ輸入量は2008年に最高記録をみせたが、最近では為替レートなどの外部要因により輸入量が低迷（2009年）または横ばい（2010年）傾向をみせている。現在は調整期を経ているところであるが、今後当分の間は漸増傾向が続くと予測される。調整期を経た後、輸入量が漸増すると見る理由は以下の三つである。

第1に、既に考察したとおりに韓国の水産物貿易環境などにより、韓国のマダイ消費量は過去10年間、毎年平均25%という驚異的な増加率をみせてきたので、当分の間はこの傾向が持続すると見られる<sup>56)</sup>。韓国のマダイ養殖業が、隣接国である日本または中国と競争関係にあるため、毎年需要の増加幅ほどには生産量の増大を期待しにくい。このため、マダイの輸入量を増加させなければならない。韓国のマダイ市場では、日本産と中国産との競争は避けられないが、日本産マダイはこの間にある程度の国際競争力をつけたので、市場占有率は急激に落ちないと予想される。

第2に、韓国と日本国内の活魚貿易ネットワークの拡大<sup>57)</sup>によって、マダイの輸入と供給がより一層容易になると予想される。貿易ネットワークの拡大は、国家間の国境の障壁を取りはらって商品の品質と価格によって市場占有率を左右するようになっている。

第3に、自由貿易の流れに乗って輸入統制規制が減る可能性が高い。特に輸入関税は、

現在までも相当に低くなっているが、今後は一段と引き下げられる可能性がある<sup>58)</sup>。

輸入量が調整期を経て漸増する過程で、輸入増減率の変化には次のような要因が関わっている。まずは、韓国の魚類養殖生産動向である。韓国のヒラメ、クロソイなどの養殖魚種は現在も生産過剰という指摘があるとおり、これらの養殖魚種は日本産マダイとの市場競争がさらに激しくなるだろう。韓国の養殖魚類生産量が現在より高い水準で維持される場合、日本からのマダイ輸入量の増加率が今まで通りであると予測するのは難しい<sup>59)</sup>。これら以外にも韓国のマダイ輸入量増加の変数としては既に述べたように、中国のマダイ生産動向と韓国ウォンの為替レートおよび韓国国内の景気動向などの要因があげられる。

## 6. まとめ

### 1) 日本産養殖マダイの韓国マダイ消費への影響

日本産養殖マダイは、韓国のマダイ食文化に次のような影響を及ぼしてきた。第1に、日本産養殖マダイは、韓国のマダイ消費大衆化に貢献してきた。1990年代初頭に日本産マダイが韓国に輸入される前までは、マダイは大衆的に消費することができない魚種ではなかった。しかし、1990年代半ば以後、日本産マダイの輸入により消費の大衆化が進展した。第2に、日本産養殖マダイによる消費市場の拡大は、韓国におけるマダイ養殖の活性化と中国産マダイの輸入増大につながるようになった。すなわち、2000年以前には韓国での活マダイ流通量のうち、85%以上が日本産マダイであった。しかし、現在マダイの消費量は大幅に増えているが、日本産マダイの韓国市場シェアが20%代まで下落しているのが、その事実を裏付けている。第3に、日本産マダイは韓国でマダイ品質の高級化を主導してきた。現在も韓国の消費市場で日本産マダイは、上級品の標準となっている。原産地別消費者価格をみると、日本産がもっとも高く、次は韓国産、中国産の順である。

### 2) 日本産マダイが韓国市場進出に成功した要因

国民人口と魚類養殖生産量を比べてみると、韓国の生産量が日本の生産量とほぼ同じ水準<sup>60)</sup>であるため、韓国でも養殖魚類の供給量が十分であるといえる。それにもかかわらず、日本産養殖マダイが韓国市場に成功的に進出したのは次のような三つの理由を挙げられる。まず、日本の海洋環境と養殖技術力を土台とした養殖生産競争力の優位性を指摘できる。単位生産量あたり生産費が韓国よりはるかに低く、品質が良いのが、日本養殖マダイの競争力の強さである。第2は、韓国人のマダイに対する顧客価値観と食文化を挙げられる。韓国では昔からマダイをいろいろな形で料理し好んで食べてきた。また、マダイが持っている良いイメージはマダイの消費量を急速に増大させる原因となってきた。そのマダイ消費量急増の架け橋の役割を果たしたのが日本産養殖マダイであった。第3は、韓国の急速な経済成長も日本産養殖マダイが韓国市場への進出に成功した原因の一つであった。韓国

と日本は地理的に近いところに位置しているし、活魚を生産者から消費者に簡単に輸送できる道路、港湾、運搬手段などの社会的インフラがよく構築されている。また、急速な韓国の経済成長は消費者に水産物消費の高級化求める欲求を増大させ、隣接国である日本から養殖マダイ輸入量を持続的に増やしている。

**付記** 本研究と発表を進めるにあたっては、文部科学省より科学研究費補助金基盤研究(B)の海外学術研究、研究代表者・山尾政博「東アジア水産業の競争構造と分業のダイナミックスに関する研究」により支援を賜った。記して感謝したい。

#### 注

- 1) 2009年を基準として、韓国と日本の間貿易収支をみると、韓国の対日輸出額は2兆501億円であったが、対日輸入額は4兆4,123億円であって、輸出額が輸入額の半分以下の水準であった。
- 2) 2009年対日水産物輸入額は1億9,500百万ドルであって、このうちスケトウタラ、タチウオ及びマダイの輸入量は9,500百万ドルであった。
- 3) 1999年に発効した新韓日漁業協定は、その時点まで韓国漁船が漁獲してきたスケトウタラとタチウオの操業区域（日本近海）の縮小をもたらした。
- 4) B.Kogut, Designing Global Strategies : Comparative and Competitive Value-Added Chains, *Saloon Management Review, 1985 Summer*, 15～28ページ
- 5) 国際競争力の評価には、間接的評価方式を主として選択する場合が多い。ジユンベラ 2004, 『韓中日本水産業の競争力分析と市場開放の対応案』, ソウル：韓国海洋水産開発院, 20～21ページ。
- 6) 韓国水産庁の漁業生産統計(1985)によれば、1984年にマダイ養殖生産量が初めて8トンで記録されている。
- 7) 2005年を基準として見ればヒラメとクロソイ養殖生産量は全体養殖魚類生産量の75.4%を占めている。
- 8) 養殖業者または養殖関係者からの聞き取り調査結果である。
- 9) 聞き取り調査を行った漁家の斃死率は40%前後だったが、養殖関係者によると斃死率が60%前後まで至るところもある。
- 10) 種苗費はもちろん、斃死時点までの飼料費、薬品費と人件費を含んだ諸経費が必要になるが、大量斃死した場合には、斃死体の処理費用が必要になることもある。
- 11) 1995～2004年の期間中、赤潮による養殖魚類の平均被害率は全体養殖魚類の1～2%と推計されている。台風など自然災害による被害は年によって大きく異なるが、特に2003年には養殖魚類の半分以上が被害を受けた地域が多かったし、全国的に見

ても被害率が約 30%に達した。

- 12) 柳珉錫. 山尾政博 2007, 「韓日間の養殖魚類の貿易動向と産業競争力」, 『地域漁業研究』 47 巻 1 号, 72 ページ
- 13) 柳珉錫. 山尾政博 2007, 前掲書, 72 ページ
- 14) 山口正男 1978, 『タイ養殖の基礎と実際』, 東京: 恒星社厚生閣, 248 ~ 249 ページ
- 15) 井上美佐 2003, 「魚類養殖試験, マダイエネルギー要求に関する試験」, 『平成 14 年度三重県科学技術振興センター水産研究事業報告書』, 三重県科学技術振興センター, 106 ページ
- 16) 柳珉錫. 山尾政博 2007, 前掲書, 72 ページ
- 17) 柳珉錫. 山尾政博 2007, 前掲書, 72 ページ
- 18) 病気発生前の事前予防, 病魚の処理, 栄養剤投与および餌管理などの養殖技術を意味する。
- 19) 2006 年 6 月の調査結果で, 韓国はトンヨン, コジエ, ヨスの調査平均値であり, 日本の場合は韓国と類似なサイズの稚魚を放養している宇和島 Y 地域の調査平均値である。
- 20) 養殖業者は栄養剤供給および漁場環境改善などを通して, また政府では病気防疫センター運営および制度的支援などを通して, 養殖魚類の疾病斃死率をある程度減らせる。
- 21) 船舶の総トン数を見れば, 韓国船舶は 150 ~ 220 トン規模であり, 日本船舶は 287 ~ 740 トン (主に 300 ~ 500 トン) 規模である。
- 22) 税関関係者・検疫関係者および漁業者からの聞き取り調査結果である。韓国船舶の運搬費が多少安くて, 少量運搬の際には韓国船舶を好む傾向がある。
- 23) 定期旅客船によって運搬される数量は全体輸入数量の 10%以下である。
- 24) 保税装置場とは荷役した外国物品または保税貨物を保税区域以外の場所に一時的に保管できる場所である。保税装置場の指定には管轄税関長の許可が要る。活魚など斃死危険性がある物品などは主に保税装置場に保管するが多い。
- 25) トンヨン付近には保税装置場が 30 余か所あり, その大部分はトンヨンに立地し, 2 ~ 3 か所がトンヨン近隣にある。
- 26) 2004 年を基準として見れば, 韓国の国内産と輸入産水産物の総供給量である約 490 万トン内, プサンを通して供給された量は国内産が約 90 万トン, 輸入産が約 170 万トンである。したがって, 韓国内水産物供給量の 53%がプサンを通して供給されている。
- 27) 韓国養殖活魚の約 1/3 以上がトンヨン付近から供給されていて, 輸入海産活魚の約 2/3 がトンヨンを通して供給されている。例えば, 2005 年は韓国の輸入活魚約 1 万 8 千トンのうち, 1 万 2 千トンがトンヨン港経由であった。

- 28) 韓国に到着した活マダイは、入港地で1次卸売業者と呼ばれる活魚運搬業者によって2次卸売業者に引き渡しされるのが一般的だが、2次卸売業者や輸入業者が活魚運搬業を兼業する場合もある。普通、活魚運搬業者は輸入活魚入港地に所在する場合が多くて、2次卸売業者は主に消費地に所在している。
- 29) 韓国の関税法令にはマダイに対して輸入価格の31%または1kg当り2,272ウォンのうち、高い金額を賦課するように規定されている。
- 30) 全体流通費用(87~102%) - 輸入関税(53~59%) = 輸入関税を除いた流通費用(28~49%)
- 31) ジョンイムキ 2003, 『面白く有益な水産物の話』, プサン:クトク印刷社, 103~105ページ
- 32) 高増明・野口旭 1997, 『国際経済学』, ナカニシヤ出版, 47~48ページ
- 33) 韓国外換銀行の平均告示為替における年平均売買基準率の最終告示基準である。
- 34) 韓国のマダイ養殖の採算性悪化のため、生産量が減少するなど、韓国のマダイ養殖における内部的な要因もある。
- 35) 特定魚種の価格が下落すると、消費量の一部が他の魚種から価格が下落した魚種に代替される現象を言う。
- 36) ソカンムン 2000, 『水産協同組合調査月報論壇』, ソウル:水産業協同組合中央会水産経済研究院, 7ページ
- 37) 聞き取り調査によれば、競売手数料が競落価格の3.5%前後であり、保管・荷役費など諸経費が7%前後として、競落価格の10%以上の経費が必要である。
- 38) 斃死が発生する場合、卸売市場側と活魚運搬業者および荷主の間にトラブルが発生するケースが多い。
- 39) 2001年を基準として水産物の卸売市場経由率を見れば韓国が約30%であり、日本が約60%であった。
- 40) 韓国海洋水産物開発院 2008, 「養殖魚類の消費変化分析と対応案研究」, 55ページ
- 41) 韓国海洋水産部では新鮮魚刺身供給体系を構築するために2003年から2004年にかけて、全国6か所にある鮮魚刺身加工施設の建設費用の一部を国家予算で支援した。
- 42) 鮮魚刺身加工工場は刺身を作った後、10時間以内に活魚刺身の70%以下の価格で消費者に配達することが目標であった。
- 43) 毎月中旬を基準として競落相場を調査後、年平均価格で換算した結果で、1kg当りの価格が韓国のトンヨン産は10,709ウォンであり、日本産は11,619ウォンであった。
- 44) 韓国ソウルのノリヤンジン卸売市場での日本産マダイの年平均価格は1,194円で、日本の大阪卸売市場の愛媛産マダイの年平均価格は885円であった。
- 45) たとえば、A国とB国の間、国民所得水準が40%であったが、70%水準まで上がる

などの現象をいう。

- 46) その当時の韓国魚類養殖生産量がどれほどの規模だったかを考察するため、国民1人当たりの魚類養殖生産量を比較してみると、韓国2.0kg、日本が2.1kgの水準であった。
- 47) 購買力平価（Purchasing Power Parity：PPP）は、各国の通貨を米ドルなどに換算する際に、貿易や投資・投機に影響されやすい為替レートベースでは無く、各国の通貨の購買力が同等になる換算比率を求めたものである。
- 48) 韓国海洋水産物開発院 2003, 「活魚の消費構造分析に関する研究」, 32 ページ
- 49) 韓国海洋水産物開発院 2008, 「活魚の消費構造分析に関する研究」, 48 ページ
- 50) 韓国海洋水産物開発院 2008, 前掲書, 55 ページ
- 51) 韓国海洋水産物開発院 2008, 前掲書, 48 ページ
- 52) 出土された遺物により推定した年代は、これから5,500年前から6,500年前の期間である。
- 53) 西紀1700～1800年ころ出版された「進饌儀軌」, 「進宴儀軌」, 「朝鮮料理製法」などにタイの調理方法が紹介されている。
- 54) 1809年に出版された書籍であって、主な内容は、食品料理法、農業技術、育児法などその当時の女性たちが生活するため必要な情報が記録されている古書である。
- 55) 国立水産科学院 2007, 「水辺の鼎談」, 114 ページ
- 56) 韓国の活マダイ消費量は所得水準変化と大きく関連性があるが、現在の時点で見れば、今までの所得水準向上傾向は持続すると見るためである。
- 57) 輸出側である日本では輸出業者らが生産者らと輸出価格と数量に対し常時協議または供給体系の構築を拡大し、輸入側である韓国では輸入業者らが消費地供給先を拡大していくことはもちろん、輸出業者と輸入業者および運送業者などが互いに協力しながら輸入コストを下げる協調体系の構築などを貿易ネットワーク拡大という用語で表現した。
- 58) マダイの輸入関税を見れば、1998年までは100%だったが2002年には60%、2010年には31%と低くなってきている。
- 59) 日本からの養殖マダイ輸入量を、2009年を基準として見れば、過去10年間、年平均12%の増加率を見せて来た。
- 60) 2008年を基準とし韓国の魚類養殖生産量は99,006トンであって、これを国民数（4千8百万人）に分けると、国民1人当たり2.06kgになり、日本は260,132トンなので国民数（1億2千7百万人）に分けると2.05kgになる。

# The Value of Cultured Red Sea Breams Imported from Japan in Korea

## - A Study on the Import Trend and Food Culture -

YOO Minseok  
YAMAOKA Masahiro

### Abstract

Recently, the volume of red sea breams imported from Japan to Korea has been remarkably increasing, while domestic production is also showing a rapid increase. This paper has three objectives. The first is to analyze the increase in cultured red sea bream production in Korea and Japan, the trend of trade between both countries, and consumers' concern. The second objective is to analyze factors affecting an increase in import of red sea breams. The third one is to predict a future development of live fish imports from Japan. Through a comparative study on the environment for aquaculture in Korea and Japan, the factors will be described.

Korea began to import red sea breams from Japan in the late 1980s; nowadays, 20% ~ 60% of red sea breams consumed in Korea are imported from Japan. The dominant presence of Japan's red sea breams in the Korean seafood market is attributed to its advantage.

The cultured red sea bream from Japan has made successful inroads into the Korean seafood market. Japan has the competitive advantage in terms of the production costs and quality of red sea breams. Along with the rise of per-capita-income, an ever-growing appetite for red sea breams has contributed to the increase in import from Japan. In culture aspect, Koreans have enjoyed red sea breams as delicacy for a long time, which is regarded as good fortune. It is predicted that the import volume of red sea breams will be decreased or stagnant, and then will turn into a rise. The main factors to cause a rapid change in the volume of Korean red sea breams' imports are ever-increasing domestic consumption, a highly appreciated Korean Won against Japanese Yen.

**Keywords** : cultured red sea bream, live fish import, volume of import, exchange rate, food culture

## 韓国における日本産養殖マダイの価値

### —輸入動向と食文化を中心に—

柳 珉 錫・山 尾 政 博

#### 要約

近年、韓国の日本産マダイ輸入が顕著に増加している。また、国内のマダイ生産量も急速に伸びている。本論文では、養殖マダイの貿易と生産の動向を規定する諸要因を明らかにし、今後の活魚輸入の展開を予測していくことである。具体的な手順は、第1に、韓・日両国の養殖マダイの生産および貿易動向と食文化などを分析すること。第2に、韓・日両国の養殖環境を比較検討することで、貿易量が変化していく原因を明らかにすること、第3に、以上の分析を通して、今後の韓国と日本の間のマダイの貿易を展望することである。

韓国が日本からマダイ輸入をはじめたのは1980年代後半だが、現在では、国内マダイ消費量の約20～60%を日本から輸入している。日本産マダイが韓国市場を席捲するようになったのは、その競争力の強さにある。韓国の日本産マダイ輸入量は過去10年の間、年平均25%の高い増加率を見せた。日本産養殖マダイが韓国市場に成功的に進出したのは日本の漁場環境がよく、養殖技術が進んでいるため、生産コストと品質の側面で競争力を確保しているためである。また、韓国の国民所得水準の向上と韓国人のマダイ食文化も日本産養殖マダイの輸入量増大に影響を与えた。韓国人は昔からマダイを好んで消費してきたし、幸運の魚として認識してきた。今後、日本産養殖マダイの貿易は輸入量がやや減少または、現状を維持する調整（横ばい）期を経た後、再び漸増が予想される。韓国のマダイ輸入量が増える主な要因として、国内マダイ消費量の変化、それと日本の円に対する韓国ウォンの為替レートの変化があげられる。

**キーワード：**養殖マダイ，活魚輸入，貿易動向，輸入量，韓国ウォン，為替レート，食文化